



総長就任と当時の同志社

大工原銀太郎が第九代同志社総長に就任したのは、昭和四（一九二九）年十一月三日であった。同月二十三日に女学校講堂でおこなわれた就任式での「就任の辞」で、彼は新島襄の同志社への遺言十カ条の中から五カ条をとりあげ、そのなかから特に「自由」とキリスト教主義にもとづく「知徳併行の教育」に言及している。（『同志社校友同窓会報』第三十七号）

同志社人物誌（68）

大工原銀太郎

河野 仁 昭

学生諸君にと断わつてだが、自由について「人間には絶対の自由なるものは、誰にも許されて居ないものであると思います。それは限られたものであつて、或る条件の下に於ける自由」である。それを乱すことを自由であると考えるのは、「真正の自由を愛する人物を養成」することを願つた新島の精神に反するものだ、と彼はいう。

また「知徳併行の教育」については、新島の時代に比べて世相が変わつたからでもあるが、その教育に多少弛みがきているように思う。これは重要な問題で、国立大学において

すら明治期の「知育」偏重教育が問題になり、その反省として、新「大学令」では人格教育の重視がうたわれているとのべている。

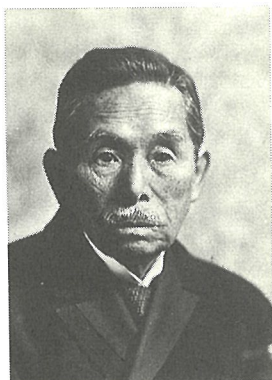
そして、あくまでも新島の遺志を継承することを強調しながら、就任の理由について次のようにいう。私は同志社には縁が薄く、また牧職にあるわけでもないのずいぶん迷つたのだが、「神が『同志社に行つて働け』と命じ給ふたやうに感ぜられたから」、敢えて重責を負う決心をした、と。

就任式は大塚節治文学部長の司会でおこなわれ、佐上信一京都府知事、土岐嘉平京都市長、新城新蔵京大総長、アメリカン・ボード代表、日本組合教会代表その他の祝辞があいついだ。有終館の失火による海老名弾正総長の辞任（昭和三年十一月二十五日）以来、総長事務取扱の任にあつた中村栄助理事は「招聘の辞」の冒頭、次のようなべた。

「昨年十一月海老名総長御辞任以来過去一ケ年間我同志社には実に不祥事件が惹起致まして学の内外を問はず苟も心あるものは等しく非常に心痛致した事でありました」

また、教職員代表の和田琳熊は、同志社五十年の歴史はとかく暗雲に覆われがちであつ

た。今もそうであり、また将来もそうかもしれない。新総長は「校内の輿論を尊重して戴きたい」、ただし「単に輿論に盲従される」のではなく、過去の経験によって養われた「最善の良心の判断に随って」事に処していただきたい、と希望している。



中村栄助総長事務取扱



西村金三郎理事

確かに同志社は多難のときであった。

国立大学のクリスチャン総長

大工原の同志社葬のとき堀貞一宗教主任は、昭和三年十一月に京都御所でおこなわれた天皇の大典に、五名の国立大学総長が参列したが、そのうち佐藤昌介、井上仁吉、大工原銀太郎の三名がクリスチャンだった、と述べている。さらに言葉をついで、大典のあと京都基督教青年会の招きで、井上と大工原が講演した。それを聞いていた同志社理事の一人が、「大工原博士は組合教会員である、此の方を同志社に招け」と言い出した、と堀はいう（『同志社校友同窓会報』第八十六号）。大工原は確かに、組合教会に属するクリスチャンであった。

明治元（一八六八）年一月四日、信州伊那郡の寒村に生まれた彼は、十五歳で大工原家の養子となり、東京農林学校を経て東京帝大農科大学農芸化学科に学んだ。東大農学部の前身である。卒業は明治二十七年であった。

在学中、彼は友人の勧めで小崎弘道の番町教会に通い、明治二十三年一月に小崎から洗

礼を受けたのである。（小崎「謙遜なる信徒・人に長たるの資」同右）

大工原は卒業後、大阪府河内柏原の農事試験場畿内支場に技師として赴任するが、それから、日曜学校で教えるほどの熱心な信徒として、宮川経輝の大阪教会に通った。

同志社理事であった湯浅治郎の先妻との間の娘新子と、小崎牧師夫妻の媒酌で結婚したのは、柏原農園時代であった。新子は第十代総長湯浅八郎の腹ちがいの姉である（治郎は先妻の没後、徳富蘇峰の姉初子と再婚した）。新子没後、大工原が再婚した順子は、中瀬古六郎夫人の姉のはずだ。

東京西ヶ原の農事試験場へ転勤した大工原は、海老名弾正の本郷教会の日曜礼拝に出席することになる。

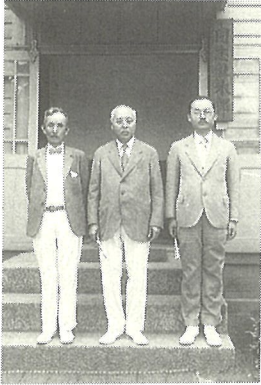
「同志社とは縁薄く、牧職にも在らざる私」と彼は「就任の辞」で述べた。確かに同志社の卒業生でも牧師でもない。同志社とは対照的な国立大学の出身者であり、しかも「酸性土壌論」（明治四十四年—学位論文）、「土壌学講義」などをもつ農学博士であった。だが、右にみたその半生は、決して同志社と無縁の人ではなかったことが頷けるだろう。

招聘をめぐる問題

農事試験場畑を歩いていた大工原が、九州大学教授を兼ねるのは大正十（一九二一）年二月で、同年九月に専任の教授となり、大正十五年三月に九州大学総長に任命された。おそらくその行政能力がかわれてである。ときに五十八歳であった。

海老名総長の辞任をめぐって惹起した紛擾に苦慮していた同志社理事会が、後任の人選に着手したのは昭和四年二月である。同月十七日の理事会は次の決議をおこなった。

「同志社重要ナル時期ニシテ且総長ノ選挙ハ人事ニ関スル事項ナルが故ニ論議ヲ須キズシテ詮衡委員ニ附託スル事」（『理事会記録』）



同志社本部前にて（昭和6年頃）
左より島本徳三郎財務部長、
大工原総長、浅野恵二庶務部長

慣行などに照らして気になる部分がある決議だが、学内事情を考慮してであつたろう。詮衡委員には上谷統、西村金三郎、大沢徳太郎、H・ペドレー、津下紋太郎の五名の理事が、中村栄助議長から指名された。この詮衡

委員会が大工原銀太郎九大総長を推薦したのは、同年四月三日の理事会においてである。「理事会記録」に次のように記録されている。

「西村理事詮衡委員ヲ代表シテ委員会ノ経過並ニ全会一致九州大学総長大工原銀太郎氏ヲ推薦シタル事ヲ報告セラレ協議ノ結果理事會全会一致ヲ以テ大工原氏ヲ同志社総長ニ推薦スルコトヲ仮決議シ之ヲ同日午后ニ開催セラレシ評議員會ニ諮問シ之レ亦全会一致ノ同意ヲ得タルヲ以テ更ニ理事会ニ於テ正式ノ決議ヲナシ（中略）同氏ヲ同志社総長ニ推薦スル旨ヲ打電シ西村理事ハ右決議ヲ携ヘテ大工原氏ニ交渉ノ為メ四日正午発列車ニテ福岡ニ向ヒ出発セリ」

いかにクリスチャンとはいえ、校友会員でもない現職の国立大学総長を後継総長に招聘しようというのは、全く異例のことである。

明治三十五（一九〇二）年に衆議院議長の片岡健吉を社長に招いたことはあった。このと

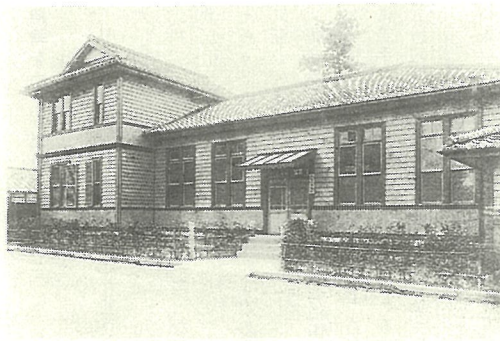
きは、前任社長の西原清東が一身上の都合で辞任したために、片岡が先輩としての責任上、就任を受諾するといういきさつがあつたと思われる。大工原にはそれすらなかった。同志社の決定はおそらく迷惑だつたろう。

交渉におもむいた西村金三郎も面識がなかった。「何等紹介をも持たざる私との初対面」であつたと、彼は「ノート」（未発表）に書き遺している。

この「ノート」によると、福岡へ着いた日（おそらく四月五日）、彼は大工原の私邸を訪れ、三時間余にわたつて、同志社と大工原の関係を縷々説明して来任を懇請した。即答を避けた大工原は、明日再会する旨を約束し、約束の日、自ら西村の宿を訪れて、やはり数時間にわたつて懇談したのであつた。

その結果、大工原は、「東京の友人山崎文部次官、西山専門（学務）局長、古在（由直）東大教授、吉野（作造）教授が賛同すれば承諾する」（前掲「ノート」と西村にこたえた。大工原は生涯にわたつて古在を敬愛していた、と順子夫人は語っている（『同志社校友同窓会報』第八十六号）

吉野作造は旧制二高以来の友人であるな



大工原総長時代の同志社本部

ど、大工原があげた四名はいずれも西村と交際があったから、西村は直ちに東上して接触した。大工原の同志社総長就任に反対する人はいなかった。日時は不明だが、西村は大工原の東上を促し、同志社理事会の代表も東京ステーション・ホテルに参集して、即時、意思決定をなしうる態勢をとった。

大工原と文部省および同志社理事などの間

で最終的な折衝がなされたあと、西村は「要は文部省も大工原君も私が先づ校紀肅正を断行したる後就任を条件とした」という、極めて重要な事柄を先の「ノート」に書きとめている。

理事会が「中島重教授ハ校友有志ノ調停ノ主旨ニ反シ学内ノ自治ヲ乱スモノナル故之ヲ解職スルコト、尚之ヲ大学聯合教授会ノ議ニ付スルコト、ス」(「理事会記録」という決定をおこなったのは、昭和四年五月十九日であった。あるいは当然ながら、それは、海老名辞任や岩倉土地問題をめぐる紛擾の余燼がくすぶっていた学内に油を注ぐ結果になり、騒動は激化した。理事会はさらに、その中心的な数名の教員を解職するという強硬策をとったのである。

大工原が九大総長を辞任したのは、昭和四年九月十二日であった。

同志社総長としての大工原

昭和四年十一月三日、大工原総長着任の日、制定後はじめての明治節であった。式後の茶話会の席で彼は「同志社は従来度々喧嘩

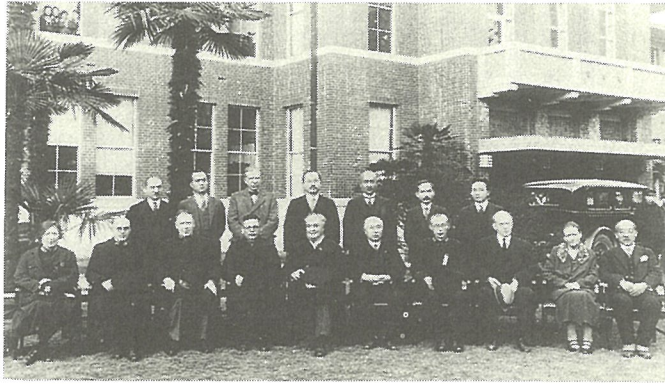
がありました、もう喧嘩だけは止めませう」と語ったと、堀貞一宗教主任はいっている(前掲)。同志社に限らず、当時は世界的な不況に加えて、思想運動などの弾圧による暗い騒然とした時代であった。

大工原の側近であった浅野恵二庶務部長は、追悼文の中で次のように書いている。

「同志社人の特徴として、総長の面前でも少しも構はず、経営の要路に在る人々が、時には口角泡を飛ばして激論する事すら、無いでは有りませんでした、如何なる時にも、先生は唯黙笑のうちに事情を静観し乍ら、常に其帰趣(趣)を捕捉する事を忘れませんでした。(同志社校友同窓会報「第八十六号」)

理事であり財務部長であった上谷統も、「先生が日常の仕事に対し、容易に然否を明らかにせられず、寧ろ遠慮勝ち」だったので、周囲の者が困ったと書いている(同右会報)。理事や職員だけではなく、法学部長の宗藤圭三も、大工原は「謙遜な態度」を現わし、「自らは積極的な行動には出られなかった」(同右)というのである。

大工原は新島襄がそうであったように、人の意見の聞き役に徹し、判断の多くを他にゆ



救世軍マップ中将（前列中央）、右へ大工原総長、
山室軍平中将、1人おいてミス・デントン（昭和9年3月2日）

だねる総長であつたらしい。九大総長時代からやはりそうであつたようだから（右の会報に収録されている九大農学部長植村恒三郎の追悼文）、必ずしも同志社の事情が十分にわか

らないとか、紛擾の余燼がそうさせたとは言いがたい。しかし全く無関係ではなかつたろう。

彼は総長就任後まもなく、好きな酒も煙草も止め、同志社教会の日曜礼拝には欠かさず出席した。それだけでなく、本部の職員たちとの午後の礼拝を率先して励行し、その影響は学内に広がつたという（松井七郎、同右）。「教育はアトモスフェア」であり、同志社のそれは「敬虔なる祈りの精神に満たされた」ものでありたいと、大工原は言つたとも松井はいう。

大工原総長時代の同志社の改革は、昭和五年六月に女子専門学部を専門学校にしたこと。同年十二月、専門学校高等商業部を高等商業学校として独立させたこと。八年四月、専門学校英語師範部に昼間学部を併設し、同じく政治経済部を昼間部にし法経部と改めたことなどで、大学予科に二年制の第二部を併置したのも大工原時代である。この時代に「寄付行為」の改正もおこなわれている。

焼失した学生会館の再建、アーモスト館、栄光館の竣工も大工原時代であつた。栄光館の館名は、旧約聖書を出典とするもので、命

名者は大工原である。彼はアーモスト館での学生の茶話会などにもしばしば出席した。

そうした大工原の最も困難でありかつ期待を寄せられていた仕事は、人事であつた。「人事行政の大任を、とかくの批評はあつたとしても、遂行されたこと」が、総長としての最も大きい同志社への貢献であつたと、法学部教授難波紋吉は書いている（前掲会報）。その仕事のために大工原は悪評をこうむらねばならなかつたのも事実であつた。自ら「私を狸と呼んで居るさうです」といって、人を笑わせていたという。

終焉

四年の任期を全うした大工原は、数え年十六歳になつてゐた。老齢を理由に再任を固辞したが、彼に代り得る人材はなかつた。

再任から数カ月後の昭和九年三月二日、救世軍参謀総長のマップ中将が、山室軍平の案内で来校した。総督のブリス大將とは福岡で会つてゐたが、マップとは初対面で、彼が栄光館で学生対象に講演をおこなつたとき、大工原は紹介者として壇上の片隅に座つてい

た。腹部に異状を覚えたのはそのときであった。

講演を終えたマップに感謝の握手をしなから、大工原は「Will also do my duty to the end」と述べたという（湯浅八郎、前掲会報）。マップの演題が「義務」であったから、それに関連づけることばであるが、そのことばどおりの総長としての晩年であった。しかもこれが、公的な場における最後のことばになったのである。

三月五日未明、容態が急変して府立医大付属病院へ入院して手術を受けたが、すでに手遅れであった。医師は再手術を断念した。

昭和九年三月九日午後四時二十分、総長在任のまま大工原銀太郎は天に召された。六十七年の生涯であった。彼以前に総長在任中に亡くなったのは、新島襄と片岡健吉の二人である。

同志社は三月十二日、社葬をもって故総長への弔意を表するとともに、『同志社校友同窓会報』第八十六号（昭和九年五月）を「大工原総長記念号」とした。

（本部社史資料室長）

『同志社百年史』について

「通史編」（全二巻）

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育（明治前半期）

第二部 キリスト教教育の受難（明治後半期）

第三部 大学への道（大正期）

第四部 戦時下の学府（昭和前半期）

第五部 再生と発展（昭和後半期）

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。（中略）

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつては必ずである。

『資料編』（全二巻）

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になつていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

『通史編』一、六五八ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇円送料五二〇円

『資料編』二、二九二ページ。

頒価・二〇〇〇円送料八三〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
（〇七五―一五―一三〇三八）